

中世英詩「梟とナイティンゲール」論

——特に法律用語を中心として——

関 本 栄 一

A Study on *The Owl and the Nightingale*

: Mainly on the legal terms

EIICHI SEKIMOTO

R. M. Wilson は *The Owl and the Nightingale* (以下, O&N と略記) の形式を論じて,
‘The poem is written in the form of debate, a form with a long history and one which was widely popular during the twelfth and thirteenth centuries. It was known by different names, *altercatio*, *debat*, *estrif*, but was essentially a contest in verse in which rival views of two or more disputants were expounded.’⁽¹⁾
と述べておるが, 形式上, 論争詩と解釈するのは, 現存の MSS. のうちの J. MS (Jesus College Oxford. 29) といわれる MS. の冒頭に ‘Incipit Altercacio inter Filomenam & Bubonem’ (梟とナイティンゲールの^{いさかい}諍論始まる) と書かれてあることから, また詩人が N と O (以下, Nightingale を N, Owl を O と略記) との言い争いについて,

Pat plait was stif & strac & strong 5
(b)

と述べていることから推測される.

(a). *altercacio*=*altercatio*; I. a. dispute (esp. of any angry kind), b. (rhet.) a series of exchanges with an opponent in the law-courts, etc., repartee (Oxford Latin Dictionary. Fascicle I.).

(b). *plait* (*Placitum*), lawsuit, trial, speech (A Short Old French Dictionary).

さらに, E. G. Stanley が ‘The form which the debate takes is influenced by the rhetoric of pleading in a court of law.’⁽²⁾ と述べているように, O&N に用いられた法律用語を論じる場合, 論争詩と見做すのが妥当であろうと思う.

そこで, 小論においては, 論争詩としての O&N の法律用語及び法律思想について考えてみ

たいと思う。(教会法をも若干考慮して)周知のように、O&Nにおいては、Nがあたかも裁判法廷における原告(plaintiff)のような態度でOの容姿の醜悪なこと及び歌声の下品さを詰り始める。(ll. 33—40)詩人はNが弁じ始めたのを聞いて

De Niztingale bigon pe speche
In one hurne of one breche.

14

と述べておるが、こゝに用いられている'speche'とは a legal term として 'a claim, suit; a law-plea' という意味である。さて、Nの暴言に堪えていたOは夕暮後、Nを小枝から追い出したいと願っているのだと反論する。(ll. 46—54)これに対して、Nは更にOの容姿、歌声、喰物などについて詰り、そして巢の不潔なことをば Marie de France の寓話—「梟の雛鳥が鷹の巢を汚したので追放された話」—を引用して詰り、揚句の果ては生れの卑しさを詰っている。(ll. 56—138)詩人は長口舌をふるったNのことを

Pos word azaf pe Niztingale,
& after pare longe tale
He song so lude & so scharpe,
Rigt so me grulde schille harpe.

142

「ナイティンゲールは、このように答え、しかも長いこと詰ってから、まるで、人間が豎琴をかきならしているように、声も高らかに鋭く歌った」と描いているが、こゝでの'tale'の意味は plaintiff 自身が口頭によって主張するか、弁護人を通して主張せねばならぬ陳述(告発)であって、ラテン語の'narratio'に相当する。⁽³⁾しかも rhetoric から云えば、Charlemagne との対話において Alcuin が強調しているように、'narratio'には brevity, clarity, probability という qualities が必要とされる。⁽⁴⁾したがって、詩人がNの口舌を 'Pare longe tale' と述べているのは Alcuin の云う qualities のうち少くとも 'brevity' を欠いていることを裏書きしているといえよう。また、後にNがOの抗弁に対して主として女性論、罪惡論、夫婦の契りなどを中心に長口舌をおち終った時、—(ll. 1298—1510に及ぶが、これに対するOの反論とともに O&N のうちでも最も重要で圧巻である)—この意味の'tale'を詩人は用いて、

Pe Hule was glad of swuche tale.

1511

と述べているし、544行においても

Pu shalt ihere an oper tale.

というNの口上にも用いている。

これはさておき、OはNの'tale'を聞いて、「一匹の蛙を呑みこんでしまったように体をふくらませ怒って」いたが、次のようにNに挑戦する。

'Whi neltu flon into pe bare
& sewi ware unker bo
Of brizter howe, of uairur blo ?' 152

「何故、お前は空地に飛んでいって、われわれのうちどちらが冴えた色をし、素晴らしい姿をしているか、はっきりさせようと思わないのかね」と、Atkins は、このくだりを **Trial by battle** (決斗裁判) のことに言及していると解説している。⁽⁶⁾また、Stanley は、

'Oft ich singe uor hom pe more
For lutli sum of hore sore.
Hu pincp pe? Artu gut inume,
Artu mid rizte ouercome ?' 542

「私は、彼ら(不安な気持を抱いている人たち)の心痛をいくらかでも和らげてあげるために歌うんです。どう思ふかね? まだ反駁するかね? お前さんは完全に敗けましたね?」と
いって、冬の季節、人々が不安な気持を抱いている時にこそ歌うのだといっている O の反論
の 'Artu gut inume' という句、並びに

Site nu stille, chatereste !
Nere pu neuer ibunde uastre. 656

「静かにとまってる! このおしゃべり鳥め! お前さんは苦境にたったことがなかった
ね」と自分の巢が決して汚らしくないことを述べて反論した O の言葉のしめくゝりの 'Nere
pu neuer ibunde uastre' という句を比喻として '**Trial by battle**' を意味していると解釈し
ている。さらに、Stanley は、O が人間の運命を予見できると自負している一例、

3ef men habbep bataile inume
Ich wat hwaper schal beon ouerkume. 1198

「人間様が互に戦っている時、いずれが敗けるかも知っているんだよ」というくだりの
'bataile' を Bruce Dickins の解釈を引用して '**Trial by battle**' にとっている。(R. M.
Wilson も '**Trial by battle**' の意にとっている。)⁽⁶⁾ Stanley の解釈のうち、541行及び656行
における比喩的解釈が妥当であるかどうかはしばらくおくとして、'**Trial by battle**' について
ふれてみよう。

'**Trial by battle**' (or the judicial combat) とは ordeal (試刑法) の一種であって、いわ
ゞ相互的な試刑法 (a bilateral ordeal) で、一方的な試刑法 (an unilateral ordeal) は神盟
裁判 (ordeal, L. indicium Dei) といわれた。そして、'**Trial by battle**' はノルマン人たちが
英国にもたらしたものだ、英国の聖職者たちは余り深刻に嫌わなかったといわれている。
何故なら一種の宗教的儀式のようなのだと彼らは考えたからだ。Henry II など、たとい
告発されたものが神盟裁判にかけられて潔白なことが証明されても、もし隣人の間での評判が

芳しからぬ場合には、王国を永久に立ち去らねばならぬと述べたといわれている。⁽⁷⁾だが、1215年の第4次ラテラン会議（第12次宗教会議）（The Lateran Council）によって、神盟裁判（Trial by ordeal）は禁止され、英国では間もなく用いられなくなった。⁽⁸⁾英国では他国にさがけてこの法令が逸早く遵守されたのであった。たゞ、‘Trial by battle’は15世紀頃より実際に用いられなくなったが、その正式に廃止されたのは1819年であったので、Atkins が、先に引用した O の挑戦（ll. 150—152）を ‘Trial by battle’ と解釈し、N が

‘No! pu hauest wel scharpe clawe,
Ne kep ich nozt pat pu me clawe,
Pu hauest cliuers supe stronge,
Pu tuengst parmid so dop a tonge.’ 156

「いや！ とんでもない。お前さんには鋭い爪がある。私ゃ万が一にも、お前さんの爪で捕わるなんてまっぴらごめんさ。お前さんの爪は強いので、ちょうど、火箸がものを挟むように、その爪で私を締め殺すつもりだね」と云って拒否したことから、O&N の制作年代を 1200年から1215年の間に近い年代と類推しているが、541行及び656行を Stanley のいうように比喻としての ‘Trial by battle’ を意味しているとすれば、また、1197行における Stanley ならびに R. M. Wilson の ‘bataile’ の解釈からすれば、N が O の挑戦を拒否したからといって、にわかに制作年代を決定し難いと思われる。

さて、O の挑戦を無視した N は、さらに O 及び O の仲間を批難してから、

‘Ac lete we awei pos cheste,
Vor suiche wordes bop unwerste
& fo we on mid rizte dome,
Mid faire worde & mid ysome.’ 180

「けれども、こんな口論はやめにしよう。というのも、こんな口論はとるにたらぬからだ。そこで、私たちは正しく判断して丁寧に穏やかな言葉をつかって話をすゝめようよ」と、や^{したで}下手に出て述べているが、‘mid rizte dome’ を、Stanley の解釈に従って、法律上の用語として考えるなら、下手どころか、相当高飛車な態度に出ているともいえよう。何故なら、「偽証をしないで」という意味にもとれるからである。さて、N が口論をやめようと云ったので、O は、一体、誰がわれわれの間に入って正しい判断を下せるかと問うと、N は Guildford の Nicholas 先生こそその人だと答え、先生の人となり話を話す。（ll. 189—198）O はこの N の提案に賛意を表するとともに、N に応ずるかのように Nicholas 先生の昔と今の性質の違いを述べ（ll. 202—204）てから、

‘Ich wot he is nu supe acoled ;
Nis he vor pe nozt afoled,
Pat he for pine olde luue

Me adun legge, & pe buue.
 Ne schaltu neure so him queme
 Pat he for pe fals dom deme.'

210

「私は、あの方が、今では情熱がすっかりさめてしまわれたことを知ってますよ。だから、昔、お前さんを可愛がったということで、お前さんにだまされて私を見棄て、お前さんに味方をされるようなことはなさないだろうよ。また、お前さんをお気に召してないくらいだから、お前さんに味方して不公平な判断を下されることはないよ」と云う。読者は、一応、二羽の鳥は意見が一致したので、Nicholas 先生のもとえ飛んでゆくのだらうと思うだらう。ところが、N は O の言葉を聞くと怒ってしまい、またまた両者の間に口論が始まる。そして、N は突如として、

'Ich graunti pat we go to dome
 Tofore pe sulfe pe Pope of Rome.'

746

「私たちが、ローマ法王様の御前で聖断を下していたゞきにゆくことには、私は喜んで賛成しますよ」と云っている。一体、一度は Nicholas 先生に判断を仰ぐことを提唱したNが、たとい、O の言葉で敗北を覚って怒ったとはいえ、ローマ法王の裁決を望んだのは何を意味するのであろうか。——終局的には、Wren から諫言された二羽の鳥は Nicholas 先生の住居を聞いて裁決を仰ぎに飛びたってゆくのであるが、筆者は 'fals dom' (l. 210) を Atkins が 'false judgment' と、また Stanley が 'improper decision' と訳しているのを参考としながら考えてみたいと思う。

法制史家によれば、⁽⁹⁾当時の英国では、'false judgment' (誤審) が下された場合の控訴裁判 (Appellate Jurisdiction) は王座裁判所 (the king's court) の取扱うことになっていた。——たゞし1234年以降王座裁判所が明確化した。そして国王が何時頃まで親裁裁判を行なったかということは明白ではないが、そこで、まだ王座裁判所が明確化していなかったにせよ、N としては法王に聖断を仰ぐより、むしろ国王の御判決を仰ぐというべきではなかったらうか。恐らく、N が法王の御聖断を仰ぐことに賛成だといった心理的背景としては、天国の **Eternal Happiness** を求めている人間、そして、その人間たちが神の教えに心を留め聖歌を歌い、その上、聖職者たちも神の栄光を讃美する歌を詠唱する。そういった人間たちや聖職者たちを助けるために自分は夜中もいとわずに歌っているのだという N の気持が働いていたのではなかろうか。(ll. 714—742) このように考えてみると、Stanley の云う次の論評にも賛成できるのではあるまいか。

'The offer made by the Nightingale in these lines to take the case to Rome is in exact conformity to canon law procedure; the impetration of a papal writ was looked upon as a regular first step in English canon law litigation, the Pope being the last arbiter in ecclesiastical disputes.'⁽¹⁰⁾

'Hong up pin ax! Nu mizt fare!'

658

「ほこを収めて、さっさと飛び去るがいゝよ！」と、逆にしっぺ返しをしている。
さらに、「勝手気まゝに告発したではないか」という激しい言葉で始まる O の抗弁、それ
につゞく熟考した上での N の反論について検討しよう。Atkinsは

'... the Owl consistently puts forward her claim, pointing out that the plaintiff has formally stated her case (*bicloped*), and that it is now her turn to cross-examine her opponent. In virtue of this right, the Owl takes up the attack, and in the *exceptio* she charges the plaintiff with many demeanours. The Nightingale follows with her "replication", in which she defends herself against the charges of the Owl....'⁽⁴⁾

と述べているが、一体、*exceptio* 及び *replication* とはどう云うことであろうか。(Atkins は ll. 837—932 の反論をも *exceptio* であると指摘している。) 手許の辞典によると、前者は「(訴訟手続で裁判所の裁定に対する) 抗議」とあり、後者は「(被告の答弁に対する) 原告の応答……」とある。⁽⁵⁾そこで、*exceptio* (=E. *exception*) について OED に記載されている事項にあたってみると、次のように解説されている。

Exception : 4. Law (after L. *exceptio* in Roman Law....) a. A plea made by a defendant in bar of the plaintiff's action: in Scots Law=Defence. Peremptory exception: one tending to the dismissal of the action. Dilatory exception; one tending to arrest its progress. Declinatory exception: a dilatory exception consisting in a denial of the jurisdiction, of the court.

要するに、*exception* とは 'I will not answer, for this court is not competent to decide this cause' とか 'I will not answer you, for you are an outlaw' というように、理由を付すか、または、*proof* (証拠事実) をつきつけて、—O&N においては Alfred 大王の諺と称せられる、いわゆる 'a dead voice' を *proof* として、O 及び N がそれぞれ *exception*, *replication* を応酬し合っているのであるが、—訴訟の進捗を阻止することを目的とした異議申立てか、(*Dilatory exception*)、訴訟却下を目的とする異議申立てかである。(Peremptory *exception*)。後者の場合には、異議が原告の訴訟事実の核心にむけられねばならぬのである。さて、N が事実を申立てゝ O をやつけると豪語したのを抑えて (ll. 544—548), O が反論し、その最後に、

'Site nu stille, chaterestre!
Nere pu neuer ibunde uastre;
Herto ne uindestu neuer andswere.
Hong up pin ax! Nu pu mizt fare!'

658

「このおしゃべり鳥め、静かにとまってなさい！ お前はこれまで苦境にたったことがないね。だから、私の云ったことにはとても返答できまい。ほこを収めて、さっさと飛び去るがいゝよ！」と N にむかって高飛車にでゝ、一応、反論を終えている。そこで、「私の云ったことにはとても返答ができまい、ほこを収める！……」という言葉から、この O の反論は、**Peremptory exception**にとられるかもしれぬが、N の訴訟事実とも思われる論旨の核心にむけられてないと考えられることと、こゝで N が O と喧嘩別れをしないで、Alfred 大王の諺を思い出し、細心の注意と知恵をふりしぼって反論をしてゆくので、**Dilatory exception**と考えるのが妥当である。

ところで、**exception** はともすると **laxity** になってゆく傾向がある。例えば、殺人罪にて訴えられたもの (the appellee) は、その私訴 (appeal, appelum) が、いわゆる 'bona fide' (真実) からでなくて、'odium et atia' (=spite and hatred) の結果の訴えであるようなことがおこる。O&N において例をとるならば、N が騎士のために不法にも監禁されたその妻の心労を思って、いくらかでも慰めようと歌っていたが、騎士は自分の恥を N になすりつけたゝめに、却って災難がおのが身の上にふりかゝってしまった。(Il. 1081—1090) そこで、N は

'Dat underyat De king Henri...

Iesus his soule do merci!....

He let forbonne pene knizt,

Dat hadde idon so muchel unrizt

Ine so gode kinges londe:

vor rizte nipe & for fule onde

Let pane lutle fuzel nime

An him fordeme lif an lime.

1098

「ヘンリー王はこのことを御賢察下されました。一神様、王様^{おんみたま}の御靈魂に御恵みを垂れ給え！—そこで、王様は御自分が立派に統治されている土地で悪虐無道な振舞をしたその騎士の公権を剥奪されました。その騎士がたゞ一途の憎悪と腹黒い嫉妬心の余り、可愛いゝ小鳥を捕えて断固として有罪を宣告したので……」と、騎士が自ら招いた災難について述べている。こゝで、詩人は 'Vor rizt nipe & for fule onde' (=through sheer spite and every foul) という言葉を用いているのは、騎士が N の行為の誠意を少しも理解しないであることを痛烈に表現していると同時に、**appellee** としての立場におかれている N に対して、全くの 'spite and hatred' から恥辱をなすりつけたのは、**exception** の **laxity** を意識していたのではないかと考えられる。

また、N は「ヘンリー王は^{くだん}件の騎士の公権を剥奪されました」と述べておるが、被法益剥奪者 (outlawry) は、「理論上は法の一切の保護を失い、みつけれれば、殺され、また、彼の動産は国王に没収され、土地は一年間国王に没収され、後、その領主に復帰する。(The land escheats to the land)」のであって、⁶⁰王の法益喪失宣告は、O&N の制作されたといわれて

いる時代においては、古代におけるように、社会から死刑の宣告を受けたものの如く、社会から疎外され、社会と戦わねばならず、あらゆる人々から追跡され、土地は略奪され、家屋は焼かれ、ちょうど野獣のように見付け次第殺されてしまうようなことはなかった。すなわち、法喪失宣告は、被法益剥奪者を見付け次第殺すという性格を失い、法廷の判決を受けるべく、法廷の召喚に応じさせる手段となってしまった。だが、法廷召喚の手段となっても、古代の実情は決して忘れられず、法廷は *Caput gerat lupinum* (=Let him bear the wolf's head) (彼をして狼の頭をつけしめよ；彼を見付け次第殺すべしとの布告) という言辞をもって法喪失を宣告したという。

そこで、O&N においても、

'Hit was wrpsipe al mine kunne,
Ferpon pe knigt forles his wunne
An 3af for me an hundred punde.'

1101

「(この騎士は)、幸福な身分を失い、私に対して100ポンド支払ったから、ヘンリー王のこの御処断は私の仲間にとって誇り高いものでした」と N は述べているのである。しかし、Atkins などは100ポンドの罰金は、当時においては、余りに高過ぎると述べているが、筆者は Stanley の云う如く、余りにも literal な解釈であるとの見解をとりたい。

ところで、outlawry に密接に関係があると考えられるのは excommunication (破門) である。いわば、an ecclesiastical outlawry であって、世俗の outlawry のようなもので、Bracton は、破門は 'a spiritual leper' であると述べている。すなわち、破門されたものは法律上合法的と認められた行為もできず、訴訟を起すこともできない。逆に訴えられることはあり、人々は破門されたもののために祓ったり、話をしても、食事を共にすることも禁ぜられていたのである。

さて、O&N において、N が O にむかって、「お前のような役人風を吹かし、不幸な出来事をふれ廻る奴に呪あれ！」(ll. 1169—1172) というと、O はすかさずに、

'Wat!' quap ho, 'hartu ihoded.
Oper pu kursest al unihoded?
For prestes wike, ich wat, pu dest;
Ich not zef pu were zaure prest,
Ich not zef pu canst masse singe:
Inoh pu canst of mansinge.'

1182

「こりゃ恐れいりました！ お前は司祭に任命されているのかね。それとも、司祭に任命されないことを呪っているのか。何故なら、まるで司祭の役目を果しているからさ。私ゃ、お前がこれまでに司祭に任命されたかどうか知らないね。また、お前は破門について充分知っていても、弥撒を歌えるかどうか、怪しいもんだね」と応酬している。これに対して N は、充分

考えぬいてから、「お前の知識は、妖術からうまれてるのだ。もし、人間様のなかにおりたいなら、妖術をぬぐいさってしまわなけりゃならん。さもなけりゃ、他の土地に逃げなければならぬんだよ」(II. 1300—1304)と云ってから、

'For alle peo pat perof cupe,
Heo uere ifurn of prestes mupe
Amanset: swuch þu art zette,
þu wiecche crfte neauer ne lete.
Ich pe seide nu lutel ere,
An þu askedest 3ef ich were,
A bisemere, to preost ihoded:
An pe mansing is so ibroded.

- - - - -

1312

「何故って、妖術に通じていたものは、昔は司祭（聖職者）によって破門されたんだよ。お前も、そういう輩だね。お前も決して妖術をあきらめてないからだよ。私ゃ、たった今、お前は呪われているんだと申し上げたね。すると、お前は軽蔑した調子で、私が聖職に任命されたのかと尋ねたね。だが、お前が破門されていることは、広く知られているので……」と激しく O を責めたてゝいるが Huganir は、この N の言葉から、詩人の生きていた時代に多数の破門者があったことへの暗示と示唆している。また、Stanley も、12世紀後半及び13世紀初頭においては、破門並びに聖務停止（interdict）がごく普通に行なわれていたと述べている。

さて、O は上に述べたように、N から妖術を巧みに扱うものとして批難される前に、自分がいかに予言力があるかを誇って、いろいろと事例をあげて自慢気にしゃべり、(II. 1190—1207)

'3ef eni mon schal rem abide
Al ich hit wot ear hit itide.'

1216

「もし、誰か叫び声をあげて追跡されている人がいると、事態がどうなるか、事前に察知してしまうんだよ」と、叫喚追跡されている人の運命を予言している。また、N が O に勝ったと思ってNの周囲につぐみ、うたいつぐみ、啄木鳥などが集ってくるのをみた O は、

'De seolfe coc, pat wel can fizte,
He mot mid me holde mid rizte,
For bope we habbeþ steuene brigte,
An sitteþ under weo(1)kne bi nizte.
Schille ich an utest uppen ow grede,
Ich schal swo stronge ferde lede
þat ower prude schal aualle.'

1685

「勇猛に戦う雄鶏だつて、当然こちらに味方するんだよ。私も雄鶏も、声が冴えており、夜

はとまり木にとまっているんだよ。だから、もし私がお前にむかって叫び声をあげて追跡すれば、頑強な仲間が集まってくるので、お前の横柄さもきっと抑えつけられるだろうよ」と逆に N にむかって脅迫している。そこで、rem, uest (hue and cry) (叫喚追跡) について考えてみよう。英米法辞典によると「往時イギリスで令状なしに犯人を逮捕しうる Common Law 上認められた方法で、角笛を吹き且つ喚声をあげて犯人を追跡すれば、その犯人逮捕は適法とされ、たとえ被逮捕者が犯人でなかったとしても、逮捕者に責任がなかった。……」と記載されている。⁴⁰ また、変死体を見つれたり、重罪犯人を見つけた場合、さらに被法益剥奪者 (outlawry) を見つけた場合には、叫喚追跡は義務とされていた。こゝに引用しい前の叫喚追跡は outlawry にむかってなされているのか重罪を犯したものにむかってなされているのかは明確ではないとしても、要するに追われるものの運命を予言しているのである。O が N にむかって叫び声をあげれば仲間が集まってくるのだと云っているのは、N を犯罪人のようにみているもののようである。何故なら、「叫喚」を聞いたものは弓矢、小刀などをもって犯人を追跡し、且つ村から村へと角笛を吹きならし一団となって犯罪人を追跡、逮捕しなければならなかったからである (Edith Rickert の編集した '*Chaucer's World*' に 1302 年の判決例として、叫喚追跡された被告に対する判決文が記載されている。) (同書 p. 41)。

ところで、O と N とは互いに力のあらん限り知恵をしぼり、ある時は詭弁を弄してお互いに一步も譲らずに口論しあっていたが、結局は、先に述べたように Nicholas 先生の判断を仰ぎ飛び去ってゆくのであるが、その前に夜が明けると共に頭脳明晰で、必要とあれば、王様の御前でも答弁できる Wren がやってきて、二羽の鳥 (O と N) にむかって

'Lustep,' heo cwap, 'lateþ me speke!
 Hwat! wulle 3e pis pes tobreke,
 An do þan (kinge) swuch schame?
 3e! nis he nouper ded ne lame.
 Hunke schal itide harm & schonde
 3ef 3e dop gripbruche on his londe.

1734

「私の云うことをよくお聞き。私にも^{ひとこと}一言云わせない！ 何ということです！ お前さんたちは、平和を掻き乱して立派な王様に恥をかゝせる^{つもり}心算かね。とんでもないよ。王様はお隠れになってもないし、御病弱でもありませんよ。もし、王様の治められている領地で平和を乱すようなことをすれば、二人とも苦難を蒙わり、面目をなくしますよ」と云って、O と N とが口論をやめて、一刻も早く判断を仰ぐために出発するのがよいと忠告する。こゝで詩人は Wren をして 'pis pes' 及び 'gripbruche' という言葉を言わしめているが、諸家の解釈のように、前者は 'the king's peace' (「国王の平和」) を、後者は 'Breach of the king's peace' (「国王の平和の紊乱」) を意味していると考えられる。ところで、法制史家によれば、「国王の平和の紊乱」は、古くは 'an act of disobedience' のことで、'public order' を破ることにより重罪とされ、犯した者は国王の敵とされ outlawry とされたのであった。「国王の

平和」とは ‘the peace of the king’s house’ (王家の神聖) 及び国王の attendants と servants の保護を意味していたが, Norman Conquest 以降, この意味は更に拡大されて, 一般的に public order を守ることゝされた. こゝでは Stanley も述べているように, 後者の意味に解釈するのが妥当であろう. なお, こゝに引用した Wren の言葉については, 早くから諸家が着目し, Frederick Tupper や Katharyn Haganir などが詳細に論じ, O&N の制作年代を見出そうとしていることを付記しておこう.⁽⁴⁾

× × × × ×

一応, O&N に用いられた主な法律用語について解説し, この作品をより深く読みとろうとする方法を辿ってみたが, 筆者自身, 法律を専門とするものではないので, 思わぬ誤りをおかしていると思う. たゞ, O&N の作者ならびに作品そのものに一步でも深く入ってゆくことができればと思い, あえて小論を考えた. また, 中世史研究家が認めているように, 法律は Rhetoric から派生したものであり, しかも, Rhetoric が主として法廷における弁論術—公衆に対する弁論術であるのは勿論のことであるが—であるとすれば, O&N についても, Rhetoric の面からの研究が必要となってくるであろう.

註

- (1) R. M. Wilson. *Early Middle English Literature* (London: Methuen, 1968), p. 159.
 - (2) Eric Gerald Stanley (ed.), *The Owl and the Nightingale* (London: Thomas Nelson & Sons Ltd, 1960), Introduction p. 33.
 - (3) Pollock & Maitland. *The History of English Law* (Cambridge Univ. Press, 1968), Vol. II. p. 605.
 - (4) Wilbur Samuel Howell. (A Translation, with an Introduction, the Latin Text, and Notes). *The Rhetoric of Alcuin & Charlemagne* (New York: Russell & Russell, 1965), pp. 100—103.
 - (5) J. W. H. Atkins. *The Owl and the Nightingale* (Cambridge Univ. Press, 1922) p. 15 note.
 - (6) R. M. Wilson. op. cit. p. 93.
 - (7) Pollock & Maitland. op. cit. Vol. II. p. 599.
 - (8) Pollock & Maitland. op. cit. Vol. II. pp. 599—600.
 - (9) Pollock & Maitland. op. cit. Vol. I. pp. 590—591.
 - (10) E. G. Stanley. op. cit. Introduction p. 29.
 - (11) Pollock & Maitland. op. cit. Vol. II. p. 606, 609.
 - (12) J. W. H. Atkins. op. cit. Introduction pp. Iiii—Iiv.
 - (13) 中島文雄編. 岩波大英和辞典 (岩波書店, 1970).
 - (14) 小山貞夫著. 中世イギリスの行政 (創文社, 昭和43年).
 - (15) 高柳賢三・末延三次編. 英米法辞典 (有斐閣, 昭和44年).
 - (16) F. Tupper. *The Date and Historical Background of The Owl and the Nightingale*, PMLA 49 (1934), (pp. 467—9).
- Katharyn Haganir. *The Owl and the Nightingale. Sources, Date, Author* (New York. Haskell House, 1966).

本論中の O&N からの引用文は E. G. Stanley の編集, 校訂した Nelson 版を使用した.

(昭和46年9月29日受理)